

3 老水夫の物語

あらすじ

一隻の船が赤道を越え、嵐に流されて、酷寒の地、南極に向かった物語。そこから針路を変えて太平洋の灼熱の海へ。途中で降り掛かった不思議な事ども。その後、いかにして老水夫が祖国にたどり着いたかの物語。

第 I 部

それは一人の老水夫

この男が 三人のうち一人を引き止める

「その長い白髪^{しら}ひげと ぎらつく目で

なにゆえ私を引き止める

花婿の屋敷の扉が大きく開かれた 5

私は一番近い親戚の者

客人たちはみんな集まり 宴^{うたげ}の仕度も整った

陽気な楽隊の音が聞こえよう」

老水夫は 骨と皮ばかりの手で客人をつかんで

「それは一隻の船」 10

「離せ 手を離せ 白髪^{しら}ひげの老いぼれめ」

すぐに老水夫は手を離す

今度は ぎらつく目で若者をつかんだ

婚礼の客人は身動きできず

三歳の子供のように耳傾ける 15

もはや老水夫の思うがまま

婚礼の客人は石に腰掛け

老人の話を聞かざるをえない

こうして かの老水夫は語り始めた

目を爛々と輝かせて 20

「船は見送られ 港を出た

心躍らせて わしらは進んでいった

教会の下を 丘の下を

灯台の下を くだっていった

ひ
陽は左手に昇った 25
海から姿を現したのだ
そうして明るく輝いて 右手の
海中へと姿を消した

ひ
日増しに陽は天高く
ついに 正午にマストの真上にかかった」 30
婚礼の客人は ここでおのが胸を打った
大きな 笛バスーンの音が聞こえたから

花嫁が広間に入っていった
バラのように頬を紅潮させて
花嫁の前を会釈しながら 35
楽隊がにぎやかに進んでゆく

婚礼の客人は おのが胸を打った
だが 有無を言わず話を聞かされる
かくして 老水夫は話を続けた
目を爛々と輝かせて 40

かぜ
「暴風が現れた 暴風は
横暴で猛々しく
大きな羽を広げて襲いかかり
南へ南へと わしらを追い立てた

へさき
マストを傾け 舳先を海中に突っ込んで進んだ 45
わめき声と鼻息が背後に迫ったが
追っ手の影を踏みながらも
必死につんのめって走るがごとく
船は全速力で進み 暴風はますますわめき
わしらは南へと逃れていった 50

やがて 霧が立ち 雪となり
恐ろしく寒くなった
マストの高さほどもある氷が迫ってきた
エメラルドグリーンかたまりの氷の塊

せつぺき
漂う氷の間から 連なる雪壁が 55
不気味な光を放った
人影も生き物の影もなく

在るはただ氷の塊^{かたまり}

こちらにも氷 あちらにも氷
辺りはすべて氷の世界 60
砕け^{きし} 軋み^{うな} 唸り^{うめ} 呻き
まるで 人が氣絶した時に発する音のように

ついに 一羽のアホウドリが目の前を横切り
霧を裂いて飛んできた
まるで それをキリストの魂のごとく 65
主の御名のもと わしらはその鳥を祝福した

鳥は 今まで食したことの無い食べ物を口にし
船の周^{まわ}りをぐるぐる廻った
氷は 雷鳴のごとき轟を発して砕け
操舵手は 氷をかき分けて船を進めた 70

良き風が背後から吹き
アホウドリは 船についてきた
毎日 餌を求め あるいは 遊ぼうと
水夫が呼ぶと降りてきた

霧や雲の中 マストやロープに止まって 75
アホウドリは九日間 タベの祈りに加わった
煙^{けふ}る濃霧をぬって 夜通し
月がしらじらと光っていた」

「ああ 老水夫に神のご加護を
こんなに苦しめている悪魔からそなたを救いたまえ 80
老水夫よ なぜそのような表情を」 石弓で
わしは そのアホウドリを射落としたのじゃ

第 II 部

陽^ひは今や右手に昇った
海中から姿を現わし
深い霧の中を 左手 85
海中に沈んでいった

良き南風が背後から吹いていたが
良き鳥の姿は消えたのじゃ
餌を求め あるいは 遊ぼうと

水夫の呼びかけに降りてくることは 二度となかった 90

わしはひどいことをしでかしたのじゃ
その所為で ^{せい}みなに呪いがかかった
わしがあの鳥を殺した所為で
風が止んだと ^{せい}みなが言う
風を吹かせていた鳥を殺すとは 95
ひどい奴だと ^{せい}みなが言う

暗くもなく 赤くもなく
神様の ^{こうべ}頭のような荘厳な陽が昇っていった
すると わしがあの鳥を殺した所為で
霧も霞も立たないと ^{せい}みなが言う 100
霧や霞を立てる鳥を殺すとは
良いことをしたと ^{せい}みなが言う

そよ風が立ち 白い ^{しぶき}飛沫が飛び
^{わだち}轍もくっきりと 船は進み
わしらは 誰も行ったことのない 105
あの沈黙の海に入っていた

風が止み 帆が垂れて
地獄の苦しみが始まった
口を開けば ただ
沈黙の海がこだますばかり 110

赤褐色の灼熱の空
マストの真上に
^{まひるどき}正午の血染めのお天道様が ^{てんとさま}かかっていた
それは 月ほどの大きさの日輪じゃった

来る日も 来る日も 115
風は立たず わしらは立ち往生
まるで 絵に描いた大海原に浮かぶ
絵に描いた船のよう

見渡す限り 水また水
それでいて 甲板は ^{ひから}干涸び 120
見渡す限り 水また水
それでいて 飲める水は一滴も無い

海水が腐っていったのじゃ ああ キリストよ
このようなことがあろうとは
実に 足のあるヌメヌメした生物が
ヌメヌメとした海面を這っていたのじゃ

125

夜になると 辺り一面
人魂が ぐるぐる輪になって踊った
海水が 魔女の油のように
緑に そして青白く 燃えた

130

わしらをこのように苦しめる悪霊が
夢に現れたと 言い張る者もいた
霧と雪の国から 九尋の海底を
わしらの後を追ってきたと 言うのであった

わしらの舌はすっかり渴き
根元からカラカラになった
まるで煤で喉を詰まらせたかのように
口をきくこともできなかった

135

ああ 老若問わず すべての者たちから
憎しみの目が向けられた
十字架の代わりにアルバトロスが
わしの首に掛けられたのじゃ

140

第 III 部

みな疲れ果て 時は過ぎ行く
喉は焼け 眼はうつろ
疲れ果て 疲れ果てて 時は過ぎ行く
みな疲れ果てた眼が 異様にどんよりしていた
その時 西方を見ていたわしは
何かが宙に浮いているのに気づいた

145

最初は 小さな斑点のようで
それから霧の塊に見えてきた
それは動きを止めず ついには
ある物影となった

150

斑点 霧の塊 やがて物影となり
段々ところらに近づいてくる
あたかも 水の精をかわすがごとく

155

沈み ジグザグに進み 急に向きを変える

喉の乾きは癒えず 唇は黒く焼け
わしらは 笑うことも泣くこともできなかった
喉をカラカラにして みな黙って立っていた
わしは腕を噛み 血をすすって
叫んだ 「船だ 船だ」

160

喉の乾きは癒えず 唇は黒く焼け
あんぐりと口を開けて みなはわしの叫びを聞いた
なんと みな嬉しそうにニタリと笑った
そして 一気に息を吸い込んだ
まるで 一気飲みをするかのごとく

165

「見ろ 見ろ」 わしは叫んだ 「もうジグザグしないで
わしらを助けようと こちらに向かってくる
風も立たず 潮の流れも無いのに
竜骨をまっすぐ立てて 進んでくる」

170

西の海面は赤々と燃えていた
陽はほとんど傾き
波間すれすれに
大きく真っ赤な太陽が 軀を休めていた
突然 あの不思議な形をした物影が
わしらと太陽の間に入ってきた

175

するとたちまち 太陽に格子縞が入り
(天なる聖母 わしらにお助けを)
まるで 日輪の大きな燃える顔が
牢屋の格子から覗いているよう

180

ああ (想いは巡り 胸が高鳴る)
船が速度を上げて近づいてくる
陽にきらきら輝くのは船の帆か
まるで ゆらめく蜘蛛の巣のよう

陽が牢屋の格子から覗いているように見えるが
あれは船の肋骨なのか
乗組員は あの女だけなのか
いや 向こうに死神か 乗組員はその二人なのか
死神は あの女の連れ合いなのか

185

女の唇は赤く 目はきよろきよろ 190
髪のはきはキラキラの金髪
肌は 癩病患者のように白い
女は 人間の血を冷たく凍らせる夢魔
「死中の生」だった

ぼろぼろの幽霊船が横付けしてきた 195
二人はサイコロを振っていた
「勝負はついたわ 勝った 勝った」
女はこう言うと 三度口笛を吹いた

ひ ふち 陽の縁 海中に沈み 星々がいっせいに輝き始める
闇が大股にやってきた 200
波のささやき 遥か彼方に消えて
幽霊船は飛び去っていった

みな いっせいに耳を澄まし 顔を背けた
胸中の恐怖が まるでコップの水を飲むように
わしの命の血をすする 205
星は翳み 夜の帳は垂れ込め
舵取りの顔がランプの灯りに灰白く浮かんだ
帆から夜露がしたたり落ちる

やがて 東の水平線上に
三日月が昇ってきた 210
下弦の端に一点の輝く星を従えて

星に付き添われた三日月のもと
一人また一人と 呻きもため息を漏らす間も無く
みな 死の苦痛に歪んだ顔を
呪いの眼差しを こちらに向けた 215

五十の四倍の数の乗組員たちが
(ため息も呻きも漏らさず)
一人また一人 命の無い一つの塊 となって
どたんどたと 倒れていった

みな之魂が肉体から飛び立つ 220
それは天に向かったのか 地獄に向かったのか
一人一人の魂がわしの脇を通り過ぎるとき
かの石弓がたてた あの矢音にも似た音を発した

第 IV 部

「老水夫よ おまえが怖い
骨と皮だけの手が怖い 225
や
痩せ細って 日に焼けて
まるで 波跡のついた砂浜のよう

「おまえが怖い そのギラギラした目が怖い
骨と皮だけの 日に焼けた手が」
婚礼の客人よ 怖がることはない 230
わしの 躰^{からだ}は 倒れて死にはしなかったのだ

独り 独り たった一人きり
広い広い海原に たった一人きり
苦しむわしの魂^{まも}をお護りくださる
守護聖人様のお情けはいただけなかった 235

多くの乗組員たちの死に顔は美しく
みな 甲板に横たわっていた
無数のヌメヌメした生物^{もの}どもは
死なない わしもまた生きていた

わしは 腐ってゆく海を見つめ 240
耐えかねて逸^そらした目を
腐ってゆく甲板に向けた
そこには 死者たちが横たわっていた

わしは天を仰いで 祈ろうとした
しかし 祈りの言葉が出る前に 245
邪悪なささやきが聞こえてきて
わしの心^{すなほこり}を砂埃のようにカラカラにした

瞼を閉じて じっとしていると
目玉がドクドクと脈打った
空と海が 海と空が 交互に 250
わしの疲れた眼^{まなこ}の上に重荷のようにのしかかる
そうして 足元には死んだ者たちが横たわる

冷たい汗^{しずく}の滴がみなの手足からにじみ出て
腐りもしないし 悪臭^{にお}いもしない
わしを見つめるその眼^{まなこ}だけは 255

誰も決して逸らさなかった

みなしご
孤児の呪いは

天上の靈魂でさえ地獄に引きずり降ろすという
ああ しかし それよりももっと恐ろしいのは
死者の目に宿る呪い
七日の間 昼も夜も わしはその呪いを浴び
それでも 死ぬことは叶わなかった

260

月は動いて 中空にかかり
一度も立ち止まらず
ゆっくりと昇り続ける
一つ二つの星を脇に従えて

265

月の光が うだる海原を あざけ 嘲り
四月に降りた霜のように白く照らしていた
しかし 船の大きな影が落ちているところは
魔法にかかった海水が
静かに 真っ赤に 燃え続けた

270

船影の先に

海蛇の群れが見えた
キラキラと白波の筋を引いて泳ぎ
からだ 躰をもたげると 小さな妖精の群れのような光が
白い飛沫となって しぶき パラパラと散った

275

船影の中に入ってくると

その色彩豊かな衣装に からだ わしは思わず見惚れた
あお 碧 みどり 艶やかな翠 くろ ビロードのような漆黑
海蛇の群れは からだ とぐろを巻いては 躰をのばして泳ぐ
通った跡は 黄金の炎がきらめいた

280

ああ 幸福な生き物たちよ どんなに言葉を尽くしても
その美しさを称え尽くすことはできない
愛の泉がこの胸からほとぼしり
わしは 思わず海蛇たちを祝福した
きっと 優しい守護聖人様のお情けで
思わず祝福できたのだらう

285

祈りを発したその瞬間 とき

アルバトロスが首からはずれ落ち

鉛のように 290
海中に沈んでいった

第Ⅴ部

ああ 眠りよ 穏やかなるものよ
北極から南極まで すべてに愛されしものよ
聖母マリア様に^{たた}讃えあれ
マリア様が天から届けてくださった穏やかな眠りが 295
わしの魂の中に滑り込んだ

甲板に長いこと置き去りにされ
空っぽだったバケツめが
雨でいっぱいになる夢を見た
目覚めると 雨が降っていた 300

唇は湿り 喉はひんやり
着ているものも ずぶ濡れだった
夢の中で水をたっぷり飲んでいたので
目覚めてもなお わしの躰は水を求めた

手足を動かしても 何も感じない 305
余りにも軽くなって 恐らくもう
眠っている間に死んでしまい
神に祝福された霊になったのだと思った

やがて 風のうなる音が聞こえてきたが
こちらに向かってくる様子は無い 310
しかし そのうなる音で帆が揺れた
すり切れて干からびていた帆が 揺れた

突然 上空が生き返った
無数の輝く火の旗が
前後左右に振られた 315
前に後ろに^{うちそと}内外に
蒼白い星々が ^{あいだ}間をぬって踊っている

近づく風音が一段と大きくなって
帆が 揺れるスゲの葉のような音を立てる
雨が黒雲の^{かたまり}塊から滝のように降ってきて 320
月が ^{はし}端にかかっていた

厚い黒雲が割れても 相変わらず
月は雲の端にかかっていた
絶壁から落下する滝のように
稲光が切れ目無く
まるで大きな激流となって 真っ逆さまに落ちてきた

325

大きな音を立てる風はこちらまでは届かなかった
でも 船は動き始めた
稲光と月光の下
死者たちが呻き声を発した

330

呻き うごめき 一斉に立ち上がる
言葉は発せず 眼を動かすこともなく
夢の中でさえ それは信じられない光景だった
あの死んだものたちが立ち上がる姿を見るなんて

舵取りに操られて 船は進み続けた
でも 風はそよとも吹いてはいない
乗組員たちはみな 持ち場に戻り
ロープを引き始めた
のびした手足は 命無き道具さながら
わしらはみな 亡霊の乗組員

335

340

兄貴の息子の死体が
膝と膝を触れ合わせて 側に立っていた
その死体とわしで 一本のロープを引いた
でも やつはわしにひと言も話しかけなかった

「老水夫よ そなたが怖い」
お静かに 婚礼の客人よ
仲間の死体に戻ってきたのは
苦しみの中で飛び立った魂ではなくて
祝福された精霊たちだったのだ

345

というのは 夜が明けるとみな両腕を垂れ
マストのまわりに集まってきて
美しい調べが みなあふの口にゆっくりと溢れて
その死体から流れ出た

350

美しい調べは辺り一面を飛び交って
やがて 一斉に太陽に向かって飛んでいった

355

ふたたび ゆっくりとその調べが戻ってきた
あるは一緒に あるはばらばらに

あるは 空から急降下する
ヒバリの歌声に聞こえ
あるは まるでこの世のすべての小鳥たちが 360
美しいさえずりで
海と空をいっぱいに行っているようだった

あるは ありとあらゆる楽器の調べ
あるは もの淋しいフルートの音色
あるは 天使の歌声となって 365
すべての天体をして静かに耳傾けさせた

^{がく} ^ね
楽の音は止んだ しかしなお
帆がはためく心地よい音は昼時まで止まず
それはまるで 青葉茂る六月に
樹々に隠れた小川が 370
眠る森に向かってひと晩中
静かに奏でる調べのようだった

昼時まで わしらは静かに進んでいった
いまだ 一陣の風も吹かなかった
ゆっくりと すべるように船は進んでいった 375
^{した}
船底から何かに突き動かされて

^{キール} ^{ひろ}
竜骨の下 九尋の海底の
霧と雪の国から
霊がついてきたのだ
船を動かしているのは その霊だった 380
真昼になって 帆のはためく音は止み
船もじっと動かなくなった

マストの真上にのぼった太陽が
船を海原に張り付けていた
しかし やがて船は 385
小刻みにぐらぐらと動き始めた
船体の半分ほどが 後ろへ前へと
小刻みにぐらぐらと動き始めた

それから突然 解き放たれた馬が ^{ひづめ} ^か 蹄を搔くように

船は急に飛び跳ねた 390
躰中の血が頭にのぼり
わしは気を失って その場に倒れた

そのまま どのくらい倒れていたのか
まるで分からない
しかし ^{いのち}生命が戻る前に 395
わしの魂にはっきりと聞こえてきたのは
空中で交わされる二つの声だった

「これがやつなのか これがあの男か
十字架で亡くなられたキリスト様にかけて
罪無きアルバトロスを 400
残忍な石弓で撃ち落とした奴なのか

霧と雪の国に
独り住まわれる精霊様は
あの鳥を愛され あの鳥はこの男を愛したのに
なのに男は その鳥を石弓で撃ち落としたのだ」 405

もう一方は優しい声
蜜のような甘い声で言った
「その男は罪を ^{つぐな}償いました
これからも ^{つぐな}償い続けてゆくでしょう」

第 VI 部

第 1 の声

「だが 教えてほしい もう一度話してくれ 410
そなたの優しい声で答えてほしい
なぜ あの船はあんなにも速く進むのか
大海原はいったい何をしているのか」

第 2 の声

「主人の前で奴隷が口を閉ざすように ^{あるじ}
大海原はそよ風も立てず 415
輝く大きな ^{まなこ}眼を静かに
天上の月に投げかけているだけ

どちらに進めばよいかと訊いているよう ^き
というのは 大海原が凧ぐも荒れるも月次第 ^な
見て 兄さん 何と優しく 420

月が海原を見下ろしていることでしょう」

第1の声

「しかし なぜあの船はあんなにも速く進むのか
波も風も無いというのに」

第2の声

「前方の大気は切り裂かれ
背後で大気は閉じる 425

兄さん 高く飛んで もっともっと高く
さもないと遅れてしまいます
いずれ あの水夫が眠りから覚めるにつれて
船も次第に速度を緩めましょうが」

わしは目を覚ました 船は進んでいた 430
穏やかな天候の中を進むがごとく
夜 静かな夜で 月が頭上にあった
死者たちがいっせいに立ち上がった

全員が甲板に立っていた
やつらには教会の地下墓所こそふさわしい 435
わしを睨むやつらの石のような目が
月光を受けてキラキラしていた

死んだときのやつらの苦痛と呪いは
いまだ消えてはいなかった
わしは やつらから目を逸らすことも 440
天を見上げて祈ることもできなかった

やがてその呪縛を解かれ もう一度
わしは青い海原に目をやった
遥か彼方に目をやったが 何も見えてこない
そろそろ見えてもよい筈なのに 445

人淋しい道を
恐怖におののいて歩く者が
恐ろしい悪魔にすぐ後ろをつけられていると知り
一度だけ振り返ると 後はもう
二度と振り返らず歩き続けるような怖さに急き立てられて 450
わしは前方を見つめていた

間もなく 一陣の風がわしに吹いてきた
音も無く 動きも無く
海に風が吹いた跡などなかった
波紋も影も見当たらない 455

風はわしの髪を乱し 頬を撫で
牧場をわたる春風のようなだった
その風は 奇妙にわしの恐怖心を掻き立てたが
喜ばしくも思われた

船は飛ぶように進んでいったが 460
それでいて 帆は優しく風をはらんでいた
甘い香りを運ぶそよ風が
わしにだけ吹きかかる

まさか この喜びは夢ではないのか
見えてきたのは灯台の屋根の先か 465
これは見慣れたあの丘 あの教会か
これはわが故郷か

船はゆっくりと入り江に入っていった
わしはすすり泣きながら祈った
ああ神よ 夢ではありませんように 470
さもなくば 永久の眠りを

入り江はガラスのように透明で
海面はすべすべとしていた
湾には月明かりが射し
月の影が落ちていた 475

岩場は明るく そこに立つ教会も
明るく輝いていた
月明かりに照らされた風見鶏が かざみどり
沈黙に包まれて動かない

湾は 静かな光に包まれて輝いていた 480
やがてその湾内に立ち上がってきたのは
それまで見えなかった多くの姿
深紅の姿したものが現れてきた

へさき
舳先から少し離れたところに
その深紅の姿はあった 485
甲板に目を向けると
ああ キリストよ なんとという光景

死体は皆 命が抜けてべったりと横たわっていた
そして 聖なる十字架に掛けて 嘘ではない
光に包まれた天使が 490
それぞれの死体の上に立っていた

この天使の一団がみんな手を振っていた
それはまさに天国の光景
一人一人が美しい光となって
陸地に合図を送っている 495

この天使の一団がみんな手を振っている
誰も声を発しない
無言なのだ ああ しかしその沈黙が
わしの胸に音楽のようにしみ込んできた

だが間もなく オールが水を打つ音が聞こえて 500
水先案内人の呼ぶ声がした
思わずそちらに目を向けると
一艘そうの小舟が姿を現した

水先案内人とその息子
彼らが全速力で漕いでくる 505
天なる神よ
死んだ奴らも決して打ち消せない喜びだった

もう一人の姿が見え その声が聞こえた
それは かの立派な隠者様
森でご自分でつくられる美しい賛美歌を 510
朗々とうたわれる隠者様
その方こそ わしの魂を清め
アルバトロスの血を洗い流してくださるお方

第 VII 部

この善良な隠者様が住まわれる森は
海に向かって下っている 515
その方は 朗々とした声でうたい

遠い国からやってくる水夫たちとの会話を
いつも楽しんでおられる

その方は ^{あした}朝に昼に夕べに膝まづいて祈っておられる
ふっくらとした座布団は ^{ざぶとん}
苔ですっぼりと覆われた
朽ちた檜の古木の切り株だった

520

小舟が近づき 話し声が聞こえてきた
「なんと これは不思議
今しがた合図を送っていた
無数の美しい明かりはいずこに消えたか」

525

「まことに不思議じゃ」と隠者様
「わしらの呼びかけに誰も応えない
甲板は反り返り ^そあの帆を見よ
みな ぼろぼろだ
こんな光景は見たこともない
もつとも それが

530

わしの森の小川にたまった
枯れ葉の残骸というなら話は別だが
ツタの茂みに雪が重く積もって
メス狼の子を食べるオス狼に向かって
木の上からフクロウの子がホーホーと鳴く時期じゃ」

535

「ああ 神様 あれは悪魔の顔です
恐ろしい」と水先案内人
「進め 前へ進め」と
隠者様は楽し気に言われた

540

小舟が船に近づいてきた
わしはものも言えず 身動きもできなかった
小舟が船の真下まで来ると
はっきりと ある音が聞こえてきた

545

海底でごろごろ鳴る音がする
段々と大きく ますます怖く
ついにその音が船に届くと 入江が真っ二つに割れ
船は鉛のように沈んでいった

空と海に木霊^{こだま}する 550
その大きな恐ろしい音に気を失って
溺れ死んで七日も経った者のように
わしの躰は海上を漂った
しかし次の瞬間 夢のように場面変わって
わしは水先案内人の小舟に乗っていた 555

船が沈んだところは渦が巻き
小舟がぐるぐる回った
その音が丘に木霊^{こだま}す^{ほか}他は
辺りは 静まり返っていた

わしが唇を動かすと 水先案内人は叫び声をあげ 560
気を失って 倒れた
信心深き隠者様は天を仰いで
じっと坐ったまま祈られた

わしがオールを握ると 水先案内人の息子は
今や 気がふれた様子で 565
大声で笑い続けながら
両の目をきよろきよろと
「ははあ なるほど
悪魔殿は舟の漕ぎ方をご存知ってわけだ」

ついに まぎれもなくわが故郷^{ふるさと}に戻り 570
わしは 固い大地にしっかりと立った
隠者様も小舟から降りてこられたが
ふらふらして 立つのもおぼつかないご様子

「懺悔^{ざんげ}します 罪のお赦しを」と言うと
隠者様は十字を切られて 575
「さあ すぐにも告白するがいい さあ言うのだ
おまえは一体 何者」

途端に この躰は
悲しい苦しみによじれ
押されるように わしは話し始めた 580
すると わしは苦しみから解き放たれたのだ

その時以来 何時^{いつ}とはなく
苦しみが戻ってくる

すると あの恐ろしい体験を語るまで
わしの胸の内は灼熱の炎に燃えるのだ 585

わしは 夜のように国々を渡ってゆく
わしには不思議な話す力が備わって
相手の顔を見た瞬間ときに
わし話を聞くべき者かどうかがわかるのじゃ
すると その者に向かってわしの体験を話してやる 590

向こうの入口から突然のざわめきじゃ
婚礼の客人たちが騒いでおる
花嫁と花嫁に付き添う娘らが
庭あずまやの東屋でうたっている
遠くで タベの祈りの鐘が聞こえる 595
わしに祈れと言っておる

ああ 婚礼の客人よ この魂は
広い広い海原うなばらで 一人きりじゃった
あまりにも孤独で 神様さえ
いらっしゃるとは思えぬほどだった 600

善良なる友と一緒に
教会へ歩いて向かうことこそ
婚礼のご馳走よりも
わしには遥かに美味しいご馳走おいなのじゃ

一緒に歩いて教会に向かい 605
一緒にお祈りをする
そして一人一人が おの己が父なる神に膝まづく
年寄りも赤子も愛しい友も
楽し気な若者と娘も みんな

さらばじゃ さらばじゃ だが 610
婚礼の客人よ おまえに言っておきたいことがある
よく祈る者こそ よく愛する者じゃ
人でも 鳥でも けもの獣でも

もっともよく祈る者は もっともよく愛する者
大きいものも小さいものも この世のすべてを愛する者 615
なぜならば わしらを愛してくださる神様が
すべてを創られ すべてを愛されるからじゃ

輝く^{まなこ}眼と 歳で白くなった^{ひげ}髭の

その老水夫は立ち去った

そして婚礼の客人も

620

花婿の戸口に背を向けた

客人は まるで気を失っていたかのように

^{ぼうぜん}茫然として立ち去った

しかし次の日の朝 目覚めたときには

これまでよりも真面目で 賢い者になっていた

625

(山中光義訳)